

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

E.ヴァレーズにおける政治的前衛と芸術的前衛の結合(2):
ニューヨーク・タイムズの記事に見るヴァレーズ受容

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2004-12-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
URL	所属:
	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/829

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



E. ヴァレーズにおける政治的前衛と芸術的前衛の結合（2）

—— ニューヨーク・タイムズの記事に見るヴァレーズ受容 ——

沼 野 雄 司

0. はじめに

本論文の目的は、エドガー・ヴァレーズ Edgard Varèse (1883-1965) の音楽活動を、両大戦間におけるアメリカ合衆国という、特殊な磁場との共振関係から捉えようとするものである。1920年代から30年代にかけては、亡命知識人たちを中心にしてアメリカの知性をもっとも社会主義思想に接近した時期であり、前衛作曲家たちの活動も、当然ながらこの背景を何らかの形で反映せざるを得なかった。

われわれは既にこの時期のヴァレーズの歩みを、当時のアメリカの政治状況、そして彼をめぐる左翼芸術家たちという側面から観察したが（沼野 2003）、本論文ではさらにアメリカにおけるヴァレーズ受容という観点からアプローチを試みる。具体的にはアメリカを代表する日刊紙 The New York Times の記事を綿密に追いながら、その中でヴァレーズと彼をめぐる音楽環境がどのように記録されているかを観察することになるが、ここからは当時の社会におけるヴァレーズの位置がある程度明らかになるはずである^(注1)。また、決して伝記研究が十分ではないヴァレーズの場合、こうした作業は基礎資料の充実という点で、一定の意義があるものと考ええる。

調査対象としたのは、ヴァレーズがアメリカに亡命して以降死去するまで、すなわち1915年から1965年までの The New York Times（以下、タイムズ）で、ここからヴァレーズの名前が現れる記事および広告を可能な限り収集し、検討した。全体の記事数は224で、これらはすべて論文末に見出しと日付、そして署名のある場合には執筆者を記載した^(注2)。

以下、ヴァレーズがアメリカを拠点にした50年間を、（1）1915～19年、（2）1920年～28年、（3）1929～37年、（4）1938年以降、という4期に分けて順に観察することにした。

1. 1915～1919年：指揮者としての活動

1-1 ヒッポドロームでのベルリオーズ演奏会

ヴァレーズ関連の記事が最初にタイムズに現れるのは、1917年3月19日である。

「ミサを歌う350人」と見出しが付いたこの記事は、ベルリオーズの《レクイエム（死者のた

めの大ミサ曲)》が、ヨーロッパにおける第1次大戦の戦没者を追悼して4月1日にヒッポドロームで演奏されること、そこでは350人の大合唱隊が出演することなどを伝えた後で「このミサ曲はエドガー・ヴァレーズによって指揮される。彼はパリの《民衆の城》合唱団を組織した人物であり、フランス軍を傷病兵として免役されているところである」と記している。

演奏会はギボンズ枢機卿をはじめとする聖職者、財界人、芸術家などの支援を受けた「無党派的・無宗派的」なものであったというが、ヨーロッパから戦火を避けてアメリカに渡ったヴァレーズにとって、この仕事はアメリカでの最初の大きな仕事だったはずである。これは、それ以前のタイムズに記事が見当たらないことから明らかだ。

象徴的に思われるのは、ヴァレーズが新大陸での「デビュー」を飾ったこの演奏会がきわめて特別な状況で行なわれていることである。

1917年2月、ドイツが無制限潜水艦戦を開始し、多くのアメリカの商船が撃沈させられた。ウィルソン政権はドイツの行為を「人類にたいする戦争」と定義し、1917年4月6日に宣戦を布告する。すなわちこのベルリオーズ演奏会は第一次世界大戦の参戦数日前という緊迫した事態の中で行なわれたものだったわけである。

4月1日付のタイムズは「今週の演奏会」の欄で、当日の夜に行われるヒッポドロームの演奏会をヴァレーズの顔写真と共に大きく掲載すると共に、「エドガー・ヴァレーズに関するいくつかの事柄」と題された記事で、ヴァレーズを「若いフランスの兵士であり作曲家」と紹介し、「フランスにおいて戦争で負傷し、さらに肺炎を病んで除隊した」ことを伝えている^(注3)。

4月2日付のタイムズは、さっそく演奏会の結果を報じているが、演奏に対する評価は厳しい。

昨夜ヒッポドロームで、ベルリオーズのレクイエムの演奏が行なわれた。すでに告知してあったように、これは全ての国の戦争犠牲者追悼のためのものである。(中略) ヴァレーズ氏の指揮は失望を免れるものではなかった。彼の楽譜の解釈からは生気が感じられず、音楽の重要な細部への彫琢も足りない。単に外面的な効果が求められただけである。この演奏は全体として退屈なものであった。(1917年4月2日)

ただし、興味深いのは、記事の中でヴァレーズが「塹壕の中で役目を果たした」後にアメリカに移住したことが強調されていることである。大戦参戦直前のアメリカにあつては、フランス人ヴァレーズが連合国の務めを果たした上で、正当な手続きにおいて音楽活動を行っていることは、少なからぬ重要性を持っていた。

1-2 ニュー・シンフォニー・オーケストラ

1919年、ヴァレーズは「ニュー・シンフォニー・オーケストラ」を創立。これに関する記事が最初にタイムズにあらわれるのは1919年3月9日である。

「オーケストラと共に」と見出しが付けられたこの記事は、4月11日、12日にカーネギー・ホールにおいて、このオーケストラの最初の演奏会が開催されることを伝えている。記事の中で目をひかれるのは次の部分である。

先頃、社交界の女性にも認知されたニューヨークの「ザ・ニュー・シンフォニー・オーケストラ」は、200人のアクティヴな団員によって共同経営され、また同時にニューヨーク音楽連盟に所属するニュー・シンフォニー・オーケストラ協会という形態をとる予定である。
(3月9日)

すなわちこのオーケストラは、当初より協同組合的な理念を掲げている点において、これまでのオーケストラとは全く異なっていた。この考え方は生涯を通じてヴァレーズの音楽活動の特徴づけるものといつてよい。

1919年4月11日、彼らの最初の演奏会が行なわれた(3月23日のタイムズに掲載された広告を図1に示しておく)。プログラムはバッハ、カゼッラ、バルトーク、ドビュッシー、デュボンというもの^(注4)。しかし、翌12日に掲載された批評は、指揮がアメリカ国歌の演奏の冒頭部分でまごついたことを指摘すると共に、オーケストラについても「バッハ作品は、単にのこぎ

—THE—

New Symphony

ORCHESTRA

of the Musicians' New Orchestra Society
EDGAR VARESE, Conductor
CARNEGIE HALL

EVGS.—APRIL 11, 25—MAY 9
MATS.—APRIL 12, 26—MAY 10

Season Tickets three evenings or three
afternoons; Lower tier boxes (six seats),
\$59.40; Upper tier boxes (six seats), \$49.50;
Parquet seats, \$6.60; Dress Circle, \$4.95;
Balcony, front, \$3.30; Balcony, \$2.48; Single
Tickets, boxes, \$3.30, \$2.75; others, \$2.20,
\$1.65, \$1.10, 83c. These prices include war
tax. Subscriptions should be mailed to
THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA,
S. S. MACMILLEN, Manager.
25 W. 42d St. Phone Murray Hill, 3426.
Mason & Hamlin Pianos Used.

図1

りで木を切るような音だったし、何の性格ももっていなかった」と、酷評に近い。評者は最後に「ヴァレーズ氏は、次のマチネー演奏会では同じ曲目をはるかによく演奏するだろう。しかし、このニュー・シンフォニー・オーケストラの運命は神のみぞ知るといったところである。ともかく昨夜は指揮棒がオーケストラよりも強かった」と結ぶ。

そして4月20日付のタイムズは、ヴァレーズがこのオーケストラの指揮者を去り、かわりにアルトゥール・ボダンツキーが就任するというニュースを伝えている^(注6)。飽くまでも「斬新な新作」にこだわるヴァレーズと、よりポピュラーな作品を演奏するべきという楽団員の姿勢が対立し、ヴァレーズは辞任に追い込まれたのだった。おそらくはこの失敗は彼を、少数の作曲家のみによる国際作曲家組合（ICG）の設立へと向かわせる一因となった。その後、このオーケストラは1921年にニューヨーク・フィルハーモニックに吸収されるかたちで、その生命を終えている。

1-3 ヴァレーズの音楽観

この時期、ヴァレーズはタイムズ紙上で自らの音楽観について何度か述べている。1919年3月23日付のタイムズに掲載された「芸術の連盟」で、ヴァレーズは次のように語る。

私は芸術における、世界各国の連盟を提唱したい。ただし政治家たちの論争を巻き起こすような、契約も草稿も法廷の調停も組織もいない。この連盟は単に、世界に対する精神の態度の中に存在するものなのである。世界大戦の終結は、明らかに地球の人々をそれぞれ近しいものにした。我々は今やお互いを近い距離から眺めており、その接近は様々な差異を無効にする。現在我々が知っている、そして理解している「国家」というものは、些細な国民的特徴を、解消するような方向には働かないだろう。芸術——音楽、文学、絵画——の自由な交流のみが、人々を理解へと近づけることができるのだ。(1919年3月23日)

ヴァレーズのこの考え方は、その後の1920年代以降の活動にダイレクトに反映されるものである。こうして彼はインターナショナリストとして世界の芸術家の交流を呼びかけると共に、「アメリカ」という土地においても、新しい音楽が次々に生まれていることを折に触れて強調する。

例えば先の投稿からおおよそ1週間後の3月30日付けのタイムズには「ヴァレーズ氏との対話」と題された文章が掲載されているが、ここでヴァレーズは「音楽の歴史は今、現在も作られています」「アメリカの作曲家たちは彼らのメッセージを現在に生きる人々の耳に届けなくてはならないのです」と、アメリカ国内における現代作品のプロパガンダの必要性について熱心に語っている。

ニュー・シンフォニー・オーケストラの失敗は、結果としてヴァレーズをオーケストラの指揮から遠ざけたが、しかしそれは同時に、作曲家の共同体という別のアイディアへと彼を導く

ことになるのである。

2 1920～1927年：作曲家ヴァレーズと国際作曲家組合（ICG）

2-1 ICG 結成

1920年代に入るとヴァレーズは、ヨーロッパを離れて以来、ほぼ6年ぶりに作曲に取り掛かった。こうして完成したのが《アメリカ Amériques》（第一稿）である。フランス語によるタイトルの「アメリカ」が複数形になっている点はいかにも彼らしい（北・中央・南アメリカを指していると考えられる）。しかしこの作品は5年後の1926年まで初演されることはなかった。

《アメリカ》が完成した1921年、ヴァレーズは「国際作曲家組合 International Composers' Guild」（以下、ICG と略）を設立する。翌1922年2月19日には最初の演奏会が行なわれたが、なぜかこの前後のタイムズには、ICG 設立に関する記事は見当たらない^(注7)。

最初の演奏会から10ヶ月を経た、1922年11月26日付けのタイムズは「世界に広がる作曲家組合」という興味深い記事を載せている。

最も古い人間集団の一つ、ギルドという組織が、現代世界においては意外なことに芸術家たちの組織として、今日復活している。中世のギルドは、彼らの相互利益のために、個人から上納金を厳しくとりたてた。しかしこの現代のギルドは、仲間の芸術家のためにそれぞれが奉仕するという、もっとも困難な上納金を収めるのである。

ニューヨークには、演劇におけるシアターギルドという、こうした協同体は何をなし得るのかについての見本が既にある。（1922年11月26日）

注目されるのは、記事がニューヨークのシアターギルドの例を挙げていることである。この団体は1918年にローレンス・ラングナーらによって設立された演劇組織で、非商業的だが高い価値を持った作品を上演することを謳う、左翼演劇人たちの巣窟となっていた^(注8)。

記事はその後、ICG がシェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》をアメリカ初演したことを伝え、さらにはベルリンにもギルドが結成されたこと、イギリス、スイス、スウェーデンにも支部があること、そしてアルトゥール・ルリエ Arthur Lourie（1892-1966）によって、モスクワの「作曲家集団」との連係が計られていることを記している。

「ギルド（組合）」という発想、シアターギルドとの類似、そしてモスクワとの連係などからは、この団体が発足当初から、一種の左翼的な色彩を持っていたことがうかがえる。

2-2 ICG の躍進

その後も ICG の演奏会情報は定期的にタイムズに掲載されており、このグループが一定の注目を集めていた存在であることが分かる。これにともなって作曲家としてのヴァレーズも急

速に知名度を高めることになった。

1924年1月14日付のタイムズは、オーリン・ダウンズの署名による音楽欄で、ICG を大きくとりあげている。ダウンズは前日の演奏会にふれて、「この奇妙な演奏会のクライマックスは、ヴァレーズ氏の《オクタンドル》初演であった」と、ヴァレーズの音楽を評価している。ちなみに、この後ダウンズはタイムズ紙の音楽欄を長く担当し、ヴァレーズに関する多くの情報を発信することになった^(注9)。

ダウンズは1925年5月1日付のタイムズでもヴァレーズを大きくとりあげると共に、翌2日の「音楽」欄ではICGに関する記述を巻頭においた上で、様々な現代音楽の動向について記している。また、1926年11月29日付けのタイムズで、「我々のエドガー・ヴァレーズの弟子」として、アフリカ系アメリカ人の作曲家、ウィリアム・グラント・スティル William Grant Still (1895-1978) をいち早く紹介している点も注目されよう。

ICG は設立後、1922年に4回、23年に3回、24年に3回、25年に3回、26年に3回というペースで順調に演奏会を主催してゆくが、この中でヴァレーズは、中期の代表作を次々に発表していった^(注10)。

当時のICGの勢いは、若いストコフスキー Leopold Stokowski (1882-1977) を指揮者として迎えることでさらに強力なものとなった。イギリス出身のストコフスキーは、1915年にアメリカの市民権を得ており、既に1920年代にはフィラデルフィア管との仕事によって大きな注目を浴びる存在となっていた。実際、彼が出演するICG演奏会の新聞広告は、なによりもまず指揮者の名前が大きく前に出るものとなっている(図2)。

ストコフスキーは、ICGの作曲家たちのオーケストラ作品をフィラデルフィア管の演奏会でしばしば取り上げるなど、この時期のヴァレーズらの活動を強力にバックアップした。例えば1927年4月13日付の音楽欄は、カーネギー・ホールで行なわれた、ストコフスキーとフィラデルフィア管によるヴァレーズ《アルカナ》の初演に触れ、「ジョージ・アンタイル博士が到達しようとしても出来なかった」という表現で作品を称賛している。

また、同年4月18日の音楽欄では、やはりダウンズが、エオリアン・ホールで行なわれたICG演奏会について、大きくスペースを割いて報告を行なっている。ベルクの《ヴァイオリン協奏曲》、サルツェド《ハーブと管楽器のための協奏曲》、ストラヴィンスキイの《8重奏曲》、そしてヴァレーズの《アンテグラル》というラインナップからは企画の充実ぶりがうかがえるが、しかし、結果としてこれはICG最後の演奏会となってしまった^(注11)。

2-3 ICGの活動停止

ICGの活動停止に関して、ヴァレーズは1927年11月13日付のタイムズに「コンポーザーズ・ギルドの活動停止」というタイトルで文章を寄せている。

ICGは現在のところ、ニューヨークにおいて次の演奏会を開く予定を持っていない。こ

CONCERT MANAGEMENT ARTHUR JUDSON ANNOUNCES
 AEOLIAN HALL, SUNDAY EVENING, APRIL 17, at 8:30
INTERNATIONAL COMPOSERS' GUILD
STOKOWSKI (By Courtesy of the Board of Directors of the Philadelphia Orchestra)
 Conductor
 BERG: Kammerkonzert — RALZEDO: Harp Concerto —
 STRAVINSKY: Octet — VARESE: Intégrales (last two works played by request.)
 Soloists: JOSEPH ACHRON, CARLOS SALZEDO, OSCAR ZIEGLER (Soprano)
 TOWN HALL, SATURDAY EVENING, APRIL 23, at 8:30
 Combined Choral Clubs (Steinway Pianos)
Rutgers University and the New Jersey College for Women
 RECITAL MANAGEMENT ARTHUR JUDSON ANNOUNCES
 STEINWAY HALL, THURSDAY EVENING, APRIL 14, at 8:30
EVA KAY Soprano (Steinway Piano)
 AEOLIAN HALL, THURSDAY EVENING, APRIL 21, at 8:30
CARYL OAKES Violinist (Steinway Piano)

図 2

の決定に多くの友人たちは驚いているが、我々の存在理由が何であったかを思い出してもらえば、必ず納得してくれるはずである。

1921年、私が友人たちと共に、ICG を設立した時、このような組織は緊急的に必要とされていた。アメリカの音楽状況は、同時代の作曲家たちに対して、あまりにも無知だったのである。(1927年11月13日)

ヴァレーズによれば、しかしその後、状況は ICG の活動によって激変するに至った。オーケストラは新しい作品を積極的にとりあげるようになり、室内楽作品も増えた。すなわち「作曲家による作曲家のための組織として出発した ICG は、人々が無視していた同時代の音楽への関心を惹起することに成功」し、当初の目的は完全に果たされたというのである。最後にヴァレーズは「ICG は、闘争の活力に溢れた雰囲気の中でのみ生きることができる。それゆえ、常に新たな闘争に応えるための準備を保ちつつも、桂冠への道半ばで、活動を停止するのである」と結んでいる。

ただし、ヴァレーズの妻ルイスは後に、この解散はむしろヴァレーズ自身が団体の運営に疲れてしまったことが原因だと述べている (Lott 1983: 280)。実際、ヴァレーズの非妥協的な運営方針は、たびたび他のメンバーとの衝突を引き起こしており、ICG の結束は活動半ばからは非常に不安定なものとなっていた。

例えば1923年には、シェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》の再演を要求するメンバーと、

あくまでも初演作品だけにこだわるヴァレーズの中に亀裂が生じ、ルイ・グレンバーグ Louis Gruenberg (1884-1964)、やレオ・オーンスタイン Leo Ornstein (1892-2002) といったロシア出身の若手作曲家たちが ICG を脱退し、「作曲家連盟」を設立するに至った（作曲家連盟は最終的には1954年に ISCM 国際現代音楽協会と合併）。

こうした摩擦を抱えた上での組織運営が、ヴァレーズの精神と肉体を圧迫したというのは事実であろう。そして1928年以降のヴァレーズは、この ICG 解散をひとつのきっかけとして、5年あまりはパリに拠点を置くことになるのである。

3. 1928～1937年：社会主義への接近

3-1 様々な左翼人脈との交流

ヴァレーズは1928年からおよそ5年にわたって、パリとニューヨークを往復しながら活動を行っており、その間はタイムズの記事も比較的少ない。しかし大恐慌の年である1929年と、それに続くニューディール期に、アメリカの社会状況、思想状況には大きな変化が訪れた。沼野（2003）でも述べたように、アメリカの知識人たちの間における社会主義は、それに反発する動きも含めて、この時期に最盛期を迎えるのである。この中でヴァレーズは、様々な左翼人脈と直接的に接触し、共同作業を成すことになった。

まずヴァレーズは1928年初頭、アーロン・コーブランドと共同で現代音楽を紹介する演奏会シリーズをニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチ（以下、ニュー・スクール）で催している（1928年1月28日付音楽欄）。コーブランドは1927年初頭から、批評家ポール・ローゼンフェルトの後を継いでニュー・スクールで演奏会を行っているが、ここにヴァレーズが加わる形で、演奏会シリーズが企画されたわけである。

コーブランドは当時から左翼思想に強く興味を示しており、1934年にはアメリカ共産党の機関誌「ニュー・マッシュズ」にも論文を寄せている^(注12)。こうしたコーブランドとヴァレーズが、左翼思想の牙城であったニュー・スクールという場所で交差しているのはきわめて興味深い。ちなみに、この2人の共同作業が1928年以降であるのは、もともとコーブランドの作品を頻繁に演奏していたのが、ICG を脱退した「作曲家連盟」側であったこととも関連しているだろう。すなわち1927年までは両者は対立するグループに属していたわけである。

一方、翌1929年4月7日付の「アメリカにおける、ロシアとの芸術的結束の発展」は、近年はヨーロッパのみならずロシアの芸術が積極的に紹介されていることを伝えた上で、ヴァレーズが「アメリカ・ソヴィエト文化交流協会」の委員の一人であることを記している。ICG 時代からソ連と交流のあったヴァレーズにとって、これはうってつけの役割であっただろう。

また、大恐慌を経由した1930年3月21日付のタイムズは、その前日に行なわれた、ロシア-アメリカ協会の主催による、セルゲイ・エイゼンシュテイン Sergei Mikhailovich Eisenstein (1898-1948) を囲む会に、ヴァレーズが出席したことを伝えている。エイゼンシュテインは、

「戦艦ポチョムキン」(1925)で一躍名が知られるようになった後、1917年革命を扱った「十月」(1927)、そして集団農場を描いた「古きものと新しきもの」(1929)を発表した新進気鋭の映画監督であり、この時期には大作「メキシコ万歳」(未完)に取り掛かっているところだった。

興味深いのは、この次期のエイゼンシュテインが政治的に微妙な位置にあったことである。もともとソ連当局に全面的な信頼を受けて出発した彼は、「ポチョムキン」で高い評価を得るものの、20年代末にスターリンが権力を一手に握るようになると、その映画製作にも微妙な圧力がかけられるようになっていた。例えば、トロツキーが国外追放となった1929年の新作「前線」は、大きなカットを余儀なくされて、結局、「古きものと新しきもの」というタイトルで公開されている。おそらくエイゼンシュテインは既に、スターリニズムに対する危機感を感じていたに違いない。

昼食会にはヴァレーズの他にも、多くの芸術家が参加しているが、その中には左翼作家として名を成し、その後「ニュー・マッシズ」にもたびたび寄稿することになるフロイド・デル、「インターナショナル・マガジン」を編集していたノーマン・ハブグッドの夫人、そして女性の権利確立と社会主義運動において大きな功績をなし、後に赤狩りの被害を受けることにもなるリリアン・ウォールドなどが名を連ねており、アメリカの芸術界における重要な左翼人脈が出席していたことがうかがえる^(注13)。ヴァレーズもこの面々から、あるいはエイゼンシュテイン自身から何らかの影響を受けたことだろう。

また、ヴァレーズは1928年から33年にかけてのパリ滞在中にアルトー、アストゥリアス、カルペンティエルといった芸術家たちと親交を深め、シュールレアリスムの芸術家たちが、共産党からトロツキズムへと移行してゆく様子を間近で観察することになった^(注14)。

3-2 パン・アメリカン作曲家協会

ヴァレーズはパリへと移る直前の1928年4月、カルロス・チャベス Carlos Chavez (1899-1978)と共にパン・アメリカン作曲家協会という組織を立ち上げている。

チャベスはメキシコ革命後のオブregon政権における芸術制作を、画家のディエゴ・リベラと共に担った作曲家であり、1926年から28年にかけてニューヨークに滞在した際に、ヴァレーズと親交を結んだ。もともと中南米に大きな興味を持っていたヴァレーズは、この出会いをきっかけにして、とりわけメキシコという国と深く関わりを持つようになる。「パン・アメリカン」という発想は、明らかにチャベスとの関係を抜きにしてはあり得ないものだっただろう。

ただし、このパン・アメリカン作曲家協会は設立当初はパリでの演奏会が多く、タイムズ紙からはその経緯を詳細に追うことができない。確認できる限りで、最初に彼らの演奏会について触れた記事は、1932年10月16日付の小さなものである。ここでは南北アメリカの作曲家を集めた音楽会が11月1日にニュー・スクールで、翌年の1月と2月にはカーネギーホールで行なわれることが簡単に伝えられている。これらの演奏会の詳細は不明だが、演奏作曲家リストにはヴァレーズをはじめとして、コーブランド、オーンスタイン、ルース・クロフォード Ruth

Crawford Seeger (1901-1953), ヴィラ＝ロボス Heitor Villa-Lobos (1887-1959), カール・ラグルス Carl Ruggles (1874-1971) らの名が挙げられている。

さらに1933年3月7日付のタイムズは、前日に行われたパン・アメリカン協会主催の演奏会で、ヴァレーズの《イオニザシオン》がチャベス、ウィリアム・グラント・スティル、ペドレル Carlos Pedrell (1878-1941), ヴァイス Adolf Weiss などの作品と共にスロニムスキー指揮で初演されたことを、そして1934年4月16日付のタイムズは、前日に行われた協会の演奏会でヴァレーズの《エクアトリアル》が初演されたことを伝えている。1920年代のヴァレーズはもっぱら ICG で自らの新作を発表していたが、30年代にはこのようにパン・アメリカン作曲家協会を主要な発表の場としていたことが分かる。

一方、この時期のヴァレーズはメキシコの芸術家たちと交流を持っており、1933年にはディエゴ・リヴェラとフリーダ・カーロの邸宅に短期間ではあるが滞在することになった（後にこの邸宅にはトロツキーが滞在し、暗殺されることになる）。1929年にメキシコ共産党からは去ったものの、筋金入りのマルクス主義者であるリヴェラ、そしてやはりマルクス主義者として知られた文部大臣のナルシソ・バツソルスの下で、芸術局長をつとめていたチャベスなど、ヴァレーズのメキシコ人脈は左翼色がきわめて濃い。

メキシコとヴァレーズの繋がりについては、さらに1936年5月1日付の「メキシコ音楽のリサイタル行なわれる」と題された記事も注目される。メキシコ政府の代表も出席したこの演奏会は「メキシコの友人協会」主催によるものだが、記事によればこの協会の音楽部門の主任はヴァレーズが務めているのである。逆に、1936年8月23日付のタイムズによれば、チャベスはメキシコでヴァレーズの《アンテグラル》、カウエルの《シンクロニー》などアメリカの新しい音楽の紹介を手がけており、彼らの相互関係が相当に深いことがうかがえる。

合唱に関してもヴァレーズは活動を継続している。1935年12月22日、25日、27日、1936年1月2日付のタイムズによれば、彼はネブラスカ合唱団の運営委員として、合唱団のアメリカ縦断ツアーを強力に支援しており、「アメリカの西と東の文化交流は、戦後におけるヨーロッパとアメリカの交流と同じ重要性を持っており、アメリカの文化と精神的な発展において莫大な価値を有するものと思います」（1935年12月27日）と紙面で述べている。ちなみにプログラムは、バッハやメンデルスゾーン、そして革命を機にロシアからアメリカに亡命していたグレチヤニノフなど多彩なものであった。

3-3 「赤の交響曲」

1930年代のヴァレーズは、結局は未完に終わるいくつかの大作の構想を練っているが、そのひとつが《空間》である。ヴァレーズがこの作品を着想したのは1929年のパリにおいてだが（Ouellette 1966 : 131）、本格的に実現に向けての仕事を開始するのは30年代の半ばであった。

1936年11月6日付のタイムズは「ヴァレーズは《空間》交響曲を思い描く」という見出しのもとに大きな記事を載せている。

未来の交響曲作家は、ヴァイオリン製作者の代わりに科学者に助言を求めることになるだろう。作曲家、指揮者にして音楽におけるウルトラ・モダニストの一人として知られるエドガー・ヴァレーズは昨日のインタビューでそのように語った。彼はサンタフェから帰ったばかりだが、この地で彼は6ヶ月にわたって新作に従事していたという。彼は、この作品が未来の交響曲の可能性を示すものになると予感している。ヴァレーズ氏の興味は、時間軸上のリズムと同様に、空間上のリズムを作曲することにある。(中略)

ヴァレーズ氏は彼の新しい作品を「空間」と名づけている。それは単一楽章の交響曲で15分ほどを要する。この作品は電子機器などは使わずごく普通に演奏されるが、しかし彼は次の春に作品を書き終えるまでに、何らかの形で空間要素の可能性を示すものにしたいと考えている。(1936年11月6日)。

これはやや抽象的な説明であるが、さらにヴァレーズは、この作品について他の場所で次のようにも語っている (Ouellette 1966 : 131)。

主題：今日。世界が目覚める！ 前進する人間の社会。止めることはできない。搾取されるものでもなく、哀れでもない、意識された人間性。行進！ただ進むのだ (中略)。

私は作品のそこかしこに、流れ星のように、アメリカの、フランスの、ロシアの、中国の、スペインの、ドイツの革命に関する文章の断片を用いたい。繰り返される言葉は不屈の精神を持って、そして儀式的に、ハンマーの一打のごとくあるいは地下のオスティナートのごとく鼓動を打つ。(後略)

伝記作者ウェレットによれば、ヴァレーズはこの作品を世界中の都市で同時に放送する様子を思い描いていたという。例えばパリ、マドリッド、モスクワ、北京、メキシコシティ、ニューヨークの合唱団がそれぞれの言語で歌をうたい、作曲者がそれらを同期させるというのである (Ouellette 1966 : 132)。

ヴァレーズは、この作曲を進める中、1937年3月にニューヨークを訪れたアンドレ・マルロー Andre Malraux (1901-76) と知り合い、早速彼を《空間》のプランに引き込むことになった。こうして、計画当初は単一楽章であった作品は、3楽章の壮大な交響曲へと変貌と遂げる。

1937年3月4日付のタイムズは、「《赤の交響曲》が炸裂しようとしている」という派手な見出しのもとに、2人の計画を紹介している。

革命的な交響曲が、今まさに書かれている。(中略)

この情報はエドガー・ヴァレーズによってもたらされたものである。彼は現代の作曲家で、

その作品はフィラデルフィア管によって演奏されている。またアンドレ・マルローもこれを保証している。彼はフランスのゴンクール賞受賞者で、「侮蔑の時代」の著者である。(中略)

「私はどのような美学にも縛られたくないのです」とヴァレーズ氏は言う。彼の作品はこれまで、称賛、非難、失笑、熱狂的な高揚など、聴き手によって様々な反応で迎えられてきた。今回、彼は伝統的なオーケストラに、新しい楽器と「歌から叫び声まで何でも行なう」合唱を加えて、新しい響きを作ると語っている。

ヴァレーズ氏によれば、この革命的な交響曲の合唱には黒人も混じっている。さらにマルロー氏によれば、そこにはロシア人も含まれており、交響曲はすぐさまロシア国内で演奏されることになるという。(中略)

ヴァレーズ氏にとって、マルロー氏はこの作品の詩人であり、死に直面した共産主義者の心情において何が起きているのかに着目しながら、「侮蔑の時代」の叙情的な一節をリライトするという役割を担う。これは交響曲の第3楽章、すなわち終楽章で合唱がうたう言葉となるのだ。

人生における良きものを追求する主人公の自然な憧れ、そして最終的な聖化にいたる高揚を伝えるために、この作品では新しい電子楽器が使用される。オーケストラと合唱はアンプに繋がれて、会場の隅々から音が「聴き手の首の後ろを直撃」という。「なぜそんなことを？」と問うと、ヴァレーズ氏は「なぜなら、私がそうしたいからだ」と答えた。(1937年3月4日)

ここではマルローの反ファシズムとヴァレーズのインターナショナリズムが共鳴しあって、黒人やロシア人、そして南北アメリカやヨーロッパまでを含んだ壮大な作品が構想されている。それはタイムズの記者によれば「革命的」な「赤の」交響曲だったのである。

おそらく、もしもこの《空間》が完成していたら、ヴァレーズという作曲家の評価や音楽史的な位置づけは大きく変わっていたに違いない。しかし、結局この作品は、わずかにその断片が戦後の1947年に《空間からのエチュード》という室内楽として発表されてはいるものの、構想半ばのままに終わってしまった。そしてヴァレーズは1936年の《比重21・5》から、この《空間からのエチュード》まで、作曲に関しては12年間も沈黙することになるのである。

ちなみに、この1937年にはその後、舞踊家のハンヤ・ホルムがヴァレーズの《イオニザション》《オクタンデル》を音楽として用いて話題になったり(1937年8月8日)、サンタフェにおいて合唱団「スコラ・カントウルム」を組織し、古楽と現代音楽の合唱を実践したことが伝えられているが(1937年10月16日)、《空間》に関する情報、あるいはヴァレーズの作曲活動に関する情報は、全くタイムズには見出せない。

4. 1938年以降：戦中の合唱活動と戦後の状況

4-1 戦中の合唱活動

1938年から47年まで新作の発表を行なっていないこともあって、この時期以降のヴァレーズの動向は、タイムズ紙面では逐一追うことが難しくなっている。ただし、少数の記事が伝えているのは、ヴァレーズが相変わらず、合唱団の組織、指揮を行なっていることである。

まず1941年6月15日付のタイムズは、ヴァレーズが「グリニッチ・ハウス・ミュージック・スクール合唱団」を立ち上げたことを報じ、さらに7月13日付、9月7日付、9月14日付では合唱団のオーディション、そして練習の様子が伝えられている。

翌1942年、この合唱団は「ニュー・コーラス」と名称を変えた。1942年5月24日付、28日付のタイムズは、5月28日夜9時から「グリニッチハウスの40周年記念演奏会」にヴァレーズ指揮のニュー・コーラスが出演することを伝えている。その後、1942年の内にこの合唱団は「ザ・グレイター・ニューヨーク・コーラス」と再び名称を変更しており、タイムズ1942年9月27日付では「ザ・グレイター・ニューヨーク・コーラスの指揮者エドガー・ヴァレーズは、新しいメンバーのオーディションを10月中に行なう」とある。また、翌1943年の4月25日付にも「グレイター・ニューヨーク・コーラスの指揮者エドガー・ヴァレーズは春の演奏会のリハーサルを行う。現在、このための新メンバーを募集中。オーディションをパスすること。視唱も必要」と記されている。

アメリカが第二次大戦に参戦する中で、ヴァレーズはひたすらこうした合唱指揮を行なった。面白いことに、やがてこの活動は戦争が進むに連れて、慈善演奏会の様相を帯びるようになる。

1943年4月18日付、25日付のタイムズは、第2次大戦で苦しむフランス支援のための演奏会をヴァレーズが開くことを告げている。「エドガー・ヴァレーズ氏の率いるグレイター・ニューヨーク・コーラスは、昨夜、ワシントンのアービング・パレス40番地にあるアービングハイスクールにおいて、フランス救援協会、および戦うフランス救援委員会への援助として演奏会を行なった。演奏会は《勝利のために》というフランスの新聞の主催による」（1943年4月25日）。曲目は、ビクトリア、クーブラン、ダカン、ヘンデル、ラモー、バッハ、ブルックナーという古典的なものだが、ロシア民謡も歌われているあたりが興味を惹く。

1945年2月21日付のタイムズには、当日の夜にグレイター・ニューヨーク・コーラスがアメリカ作曲家のみのプログラムで演奏会を行なうこと、さらに23日には同じくヴァレーズがベリオーズ編曲による「ラ・マルセイユーズ」のアメリカ初演を、フランス解放を祝って行なうことが記されている。

この後者の演奏会は、2月24日付のタイムズにおいて「フランスは対日本戦の援助をアメリカに約束した」という見出しのもとに詳細が報じられている（当時、ヨーロッパ戦線はほぼ終

息に向かっており、枢軸国の残りひとつ、日本の動向がクローズアップされていた)。この記事によれば、ヴァレーズは自らのザ・グレイター・ニューヨーク・コーラスと、ポーランド合唱協会のメンバーなどを加えた150名の大合唱団で「ラ・マルセイユーズ」ほかを演奏した。

さらに1945年6月5日、ザ・グレイター・ニューヨーク・コーラスは、フランスの戦災孤児のための慈善演奏会を行なっている（6月3日、6月5日の同紙に情報がある）。プログラムは全て14、16、17世紀の作品。ヴァレーズはこの功績によって、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章が送られることになったが、これを拒否している（Oullette 1966：160）。

4-2 戦後の状況とまとめ

1945年夏、第二次世界大戦は終結した。ヴァレーズの作曲活動は相変わらず沈滞したままだったが、合唱活動のみは盛んに行なっている。

1947年3月31日付のタイムズは「ヴァレーズ指揮による新しい音楽集団」という見出しのもとに、ニュー・スクールに属するニュー・ミュージック・ソサエティ合唱団をヴァレーズが指揮していることを記している。この団体はやはり、モンテヴェルディ、シュッツなど16世紀、17世紀の作品をとりあげる合唱団であった。

作曲家としてのヴァレーズは1947年に、22人の合唱と2台のピアノ、打楽器という編成の《空間のためのエチュード》を発表。しかし、この演奏会はなぜかタイムズでは取り上げられていない。

1949年の1月24日付タイムズは、作曲家連盟がローゼンフェルドを追悼して行った演奏会の模様をレポートしているが、ここではヴァレーズの《ハイパープリズム》、ステファン・ヴォルペの《6つのパレスチナの歌》、レオ・オーンスタインの《3つのムード》などが演奏された。「作曲家連盟」はもともと ICG から分派した組織だが、この戦後になるとしがらみもなくなったのか、ヴァレーズ作品がとりあげられているあたりが面白い。

1950年代に入るとヴァレーズは、電子的な手段を用いた《デゼール》《ポエム・エレクトロニク》という大作を最後に発表する。ただし前者は特にタイムズに記事が見当たらず、後者もブリュッセルの博覧会での模様が1958年7月8日付で報告されているくらいである^(注15)。

そして1965年11月6日、ヴァレーズはこの世を去った。タイムズはおよそ一週間の間に「作曲家エドガー・ヴァレーズ死去」（1965年11月7日）、「ヴァレーズに捧げられた演奏会」（11月9日）、「現代音楽の父」（11月12日）、「独立独行、革命的、そして同時代の作曲家の父」（11月14日）と4本の記事を掲載し、その功績を讃えた。

以上、本稿ではニューヨーク・タイムズ紙の記事を中心にしながら、アメリカ時代のヴァレーズの音楽活動について記述を進めてきた。とりわけ重要と思われるのは、1921年から38年にかけてヴァレーズの創作が頂点を迎える時期に、彼が様々な左翼人脈と交流し、さらに一部の作品が「赤の交響曲」と呼ばれていることである。今後は、こうした背景に、彼の音楽思想、

そして作品自体を重ね合わせることによって、ヴァレーズにおける思想と音楽の相関についてさらに考察を進めたい。

●注

注1：ニューヨーク・タイムズというメディア自体の性格をめぐっては、三輪裕範『ニューヨーク・タイムズ物語』（中央公論社、1999）、ステファン・エルフェンバイン『ニューヨークタイムズ あるメディアの権力と神話』（木鐸社、2001年）などの書物がある。

注2：調査にあたっては Newyork public library の John Shepherd 氏にお世話になった。記して感謝したい。また、50年分の日刊紙を対象としているために、細心の注意は払ったとはいえ、残念ながら完全に網羅的なリストにはなり得ていないと思われる。

注3：この除隊の経緯に関しては、後に妻のルイス・ヴァレーズがその著書の中で、彼が軍隊での経験にうんざりしており、肺炎で除隊したと述べている。ただし、戦線での負傷に関しては、何も記されていない（Varese 1972：114）。

注4：この演奏会のプログラム構成については、沼野（2000）を参照のこと。

注5：この記事ではヴァレーズがかつてリヒャルト・シュトラウスのもとでアシスタント・コンダクターを務めていたと書かれているが、これは不正確である。

注6：ボダンツキーは1877年オーストリア生まれの指揮者。ウィーン宮廷歌劇場ではマーラーの助手をつとめ、この当時はメトロポリタン歌劇場の首席指揮者に就任していた。指揮者としては、ヴァレーズよりもはるかに正統的なキャリアを持った人物である。

注7：ただし注2でも触れたように、筆者が見落としている可能性は十分にあり得る。ICG の名が紙面にあらわれる最も早い例は、調査した限りでは1922年4月16日付けの紙面にある ICG のグリニッチヴィレッジにおける演奏会の情報である。

注8：シアター・ギルドの前身であるワシントン・スクエア・プレイヤーズは、社会党の幹部ローズ・ストークス、そしてアメリカ共産党の産みの親の一人ジョン・リードとも関係を持っていた。シアターギルドは、その共同経営手法および、ヨーロッパの演劇を広くアメリカに紹介するという点で ICG の活動と大きな共通点を持っている。

注9：Olin Downes（1886－1955）は、ニューヨークタイムズの批評家として、両大戦間に多くの現代音楽の記事を担当している。

注10：ICG の歩み、および演奏会の全曲目に関しては Rott（1983）の研究に詳しい。

注11：面白いのは、この日のプログラムの内、ストラヴィンスキイの《8重奏曲》とヴァレーズの《アンテグラル》が非常に似ていることである。この類似は直接的な影響関係さえ思わせるものだが、敢えて並べて演奏しているところを見ると、ヴァレーズは相当な自信を持っていたのだろう。

注12：レヴィン、ティック（2000：73）を参照。

注13：ちなみに、ウォールドと関係が深かったエマ・ゴールドマンは、やがてサンディエゴでヘンリー・ミラーに会い、彼に大きな影響を与えることになるが、そのミラーは後にヴァレーズと密接なかかわりを持つようになる。

注14：沼野（2003）を参照。

注15：こうした扱いは、筆者の見落としでなければ、ダウンズが1955年に死去したことに関係しているのかもしれない。

●主要参考文献

- Clayson, Alan.
2002 Edgard Varese (Sanctuary)
- Charbonnier, Georges.
1970 Entretiens avec Edgard Varese (editions Pierre Belfond)
- Chou, Wen-chung.
1966a Varese : a sketch of man and his music (The musical quarterly LII/2)
1966b Open rather than bounded (Perspectives of new music V/1)
- De la Motte-Haber, Helga.
1993 Die Musik von Edgard Varese (Wolke verlag)
- Lott, R. Allen
1983 'New Music for New Ears' : The International Composers' Guild (Journal of the American Musicological Society 36/2)
- Oja, Carol J.
2000 Making music modern (Oxford Univ. Press)
- Ouellette, Fernand.
1966 Edgard Varese (Eng.trans version, The Orion Press)
- Varese, Louise.
1972 Varese : a looking-glass diary (Eurenborg books)
- Varese, Edgard.
1983 Ecrits (Christian Bourgois editeur)
- 秋元秀紀
2001 『ニューヨーク知識人の源流』(彩流社)
- コーザー, ルイス
1988 『亡命知識人とアメリカ』(荒川幾男訳, 岩波書店)
- ダウンナー, アラン S.
1967 『アメリカの演劇』(大島良行, 横尾和歌子訳, 文修堂)
- ハウ, アーヴィング, コーザー, ルイス
1979 『アメリカ共産主義運動史(中)』(西田勲, 井上乾一訳, 国書刊行会)
- 堀 邦維
2000 『ニューヨーク知識人 ユダヤ的知性とアメリカ文化』(葉流社)
- 沼野雄司
2000 「ヴァレーズはなぜバッハのカンタータ31番を選んだか？」『EXMUSICA 1号』
2003 「E. ヴァレーズにおける政治的前衛と芸術的前衛の結合(1)」
『東京音楽大学研究紀要第27集』
- ミラー, ヘンリー
1945 『冷房装置の悪夢(ヘンリー・ミラー全集9)』(大久保康雄訳, 新潮社)
- レヴィン,ゲイル, ティック, ジュディス
2000 『アーロン・コープランドのアメリカ』(奥田恵二訳, 東信堂)

●New York Times においてヴァレーズの名があらわれる記事リスト（1917—1950）

膨大な紙面を対象にした調査ゆえ、残念ながら完全に網羅的なものとはいえない。それぞれの記事は見出しのタイトルが原文で記してある。また演奏会の広告に関しては演奏会のタイトル名を挙げてある。

日付（年, 月, 日）：見出し（広告はカッコで記す） / 署名

1917 Mar19 : Chorus of 350 to sing mass
 1917 Apr1 : Programs of the week
 1917 Apr1 : Some of the facts about Edgar Varese
 1917 Apr2 : Sing requiem mass for the war's dead
 1919 Mar9 : With the orchestras
 1919 Mar23 : A League of art
 1919 Mar23 : The New Symphony Orchestra (広告)
 1919 Mar30 : A talk with Mr.Varese / Edgar Varese
 1919 Apr6 : Concert of the week
 1919 Apr6 : The New Symphony Orchestra (広告)
 1919 Apr11 : Music
 1919 Apr12 : Music / James Gibbons Huneker
 1919 Apr20 : Seek Bodanzky for the new orchestra
 1919 Oct12 : Kreisler on his opera
 1922 Apr16 : Concerts of easter week
 1922 Oct8 : Music in foreign lands
 1922 Nov26 : World – wide guild of composers / Alma M. Wertheim
 1922 Dec17 : Programs of the week
 1923 Feb11 : Art
 1923 Feb25 : Current concert programs
 1923 Mar4 : American Music Guild (広告)
 1923 Apr15 : Music notes afield
 1924 Jan13 : Bach choir in English airs
 1924 Jan13 : International Composer's Guild (広告)
 1924 Mar23 : Artists' recitals for the week
 1924 Jun14 : Music : Olin Downes
 1924 Mar24 : Mme LeBlanc in recital
 1924 Nov23 : Music in Germany
 1925 Feb9 : Music / Olin Downes
 1925 Mar1 : More orchestra, new chamber music and am operatic experiment
 1925 Mar1 : The way of the transcriber in some new music volumes / Olin Downes
 1925 Mar2 : Music / Olin Downes
 1925 Dec6 : On the concert horizon
 1926 Jun25 : Music / Olin Downes
 1926 Apr11 : Programs of the week
 1926 Apr11 : Programs of an orchestra season qualities of works of modern men / Olin Downes
 1926 Apr14 : Music / Olin Downes
 1926 Nov29 : Music / Olin Downes
 1927 Jan16 : Music notes near at hand

1927 Mar27 : Sing with orchestras
 1927 Mar30 : Francis H. Markoe gives a musicale
 1927 Apr10 : International composers' guild (広告)
 1927 Apr13 : Music / Olin Downes
 1927 Apr17 : Programs of the week
 1927 Apr18 : Music / Olin Downes
 1927 Aug28 : Copland on modern music
 1927 Oct23 : Aaron copland's lectures
 1927 Nov13 : Composers' guild suspends
 1927 Nov20 : Music near and far
 1927 Nov27 : Fair Play for young America / Olin Downes
 1927 Dec4 : What is going on this week
 1928 Jan1 : Opera at the guild
 1928 Jan16 : M.Ravel honored at large reception
 1928 Jan28 : Music / Olin Downes
 1928 Mar18 : Music here and afield
 1928 Mar18 : Opera in europe
 1928 Mar18 : Varied bills of opera and orchestra
 1928 Apr14 : Philadelphians quit hall over stravinsky
 1928 Apr15 : D'indy views modern music on art basis
 1928 Apr15 : The mail bag
 1928 Apr22 : A readjustment / Carlos Salzedo
 1928 Apr29 : Distressed hearers / Jerome Alexander
 1928 Jun10 : Modern Americans
 1928 Sep23 : Activities in local galleries
 1928 Oct18 : Five liners to sail ; one due here today
 1928 Oct21 : Archipenko show presents an animated novelty
 1929 Apr7 : Cultural ties with russia to be promoted in America
 1929 Jun30 : Novelties in Paris / Henry Prunieres
 1929 Oct23 : Hisses at concert rouse Stokowski / Olin Downes
 1929 Nov3 : New music and old
 1930 Jan5 : New treasures at library / Olin Downes
 1930 Apr13 : The philharmonic abroad
 1930 May21 : Einstein predicts new art via talkie
 1930 Sep14 : Jeritza as Salome in West / Olin Downes
 1931 Jul12 : American compositions in Paris / Henry Prunieres
 1931 Nov15 : Toscanini and Baireuth
 1932 Feb7 : Activities of musicians here and afield
 1932 Mar20 : ELEKTRA in Paris / Henry Prunieres
 1932 Apr17 : Music in Berlin / Herbert F. Peyser
 1932 Sep11 : Orchestral market / Olin Downes
 1932 Oct16 : Taylor's music for theatre
 1932 Oct16 : The international festival of Venice/ Raymond Hall
 1932 Nov6 : The league of composers / Olin Downes
 1933 Jan29 : Season dull in Berlin / Herbert F. Peyser
 1933 Feb26 : Activities of musicians here and afield

1933 Mar5 : Music notes from abroad
 1933 Mar5 : Programs of the week
 1933 Mar7 : Pan-American concert
 1933 Mar25 : What is going on this week
 1934 Apr1 : Programs of the week
 1934 Apr8 : Activities of musicians here and afield
 1934 Apr15 : Pan American association of Composers (広告)
 1934 Apr15 : Programs of the week
 1934 Apr15 : The Microphone will present
 1934 Apr16 : New Music Given By Pan-Americans /H. T.
 1934 Oct7 : The Dance, Tours abroad / John Martin
 1934 Nov1 : Music Notes
 1934 Nov4 : News of the Schools
 1934 Nov8 : Music notes
 1934 Dec2 : Exchange music library
 1934 Dec9 : Activities of musicians here and afield
 1934 Dec30 : Activities of musicians here and afield
 1935 Jan20 : Activities of musicians here and afield
 1935 Mar3 : Activities of musicians here and afield
 1935 Mar31 : Programs of the week
 1935 Apr7 : Programs of the week
 1935 Sep8 : Activities of musicians here and afield
 1935 Oct27 : Activities of musicians
 1935 Nov21 : Two Premieres offered by Lange / Olin Downes
 1935 Dec22 : Nebraska singers will carol here
 1935 Dec25 : Nebraska choir to sing here today
 1935 Dec27 : A capella choir will sing tonight
 1936 Jan2 : Easter tour planned for Lincoln choir
 1936 Feb17 : French musicians aid school here
 1936 Mar1 : Mexican recital given
 1936 Mar1 : The dance experiment / John Martin
 1936 Jun28 : Composers' forum record
 1936 Aug23 : Symphonies in Mexico / D. F.
 1936 Sep13 : News of Schools and courses
 1936 Dec6 : Varese envisions Space symphonies
 1936 Dec17 : Composers' guild / Walter Anderson
 1937 Mar4 : The Red Symphony is due to explode
 1937 Aug8 : The dance : a festival / John Martin
 1937 Aug13 : Festival of dance opens in Vermont / John Martin
 1937 Aug14 : Festival dancers appear in Trend /John Martin
 1937 Aug22 : The dance : A major work / John Martin
 1937 Oct16 : Varese leaves for Hollywood
 1937 Dec19 : The dance : Busy times / John Martin
 1937 Dec26 : The dance : The week's program / John Martin
 1937 Dec29 : New York debut for Hanya Holm / John Martin
 1938 Jan2 : The dance : Hanya Holm / John Martin

1938 Jan23 : The dance : events ahead / John Martin
 1938 Feb13 : Composers on the grill
 1938 Feb27 : Composers alliance / Olin Downes
 1938 May15 : Recent recordings / Compton Pakenham
 1938 May15 : The Dance : on awards / John Martin
 1939 May14 : Recent recordings / Compton Pakenham
 1939 May28 : Microphone presents
 1939 May28 : Notes of musicians
 1940 May24 : Copland first head of composers' Group
 1940 Oct4 : Social activities in New York and elsewhere
 1940 Oct20 : The dance : a new center / John Martin
 1941 Jan4 : Composers league to form aid group
 1941 Jun15 : Notes here and afield
 1941 Jul13 : On the musical front
 1941 Sep7 : Notes of musicians here and afield
 1941 Sep14 : News of music settlement schools
 1942 May24 : Programs of the week
 1942 May28 : Music notes
 1942 Sep27 : Schools and courses
 1942 Dec27 : From the mail pouch / Walter Kramer
 1943 Feb23 : Varese will direct chorus
 1943 Apr18 : Music of the week
 1943 Apr25 : Concert aids french
 1944 Mar28 : Books-authors
 1944 May21 : Programs of the week
 1944 May22 : Music notes
 1944 Jul16 : Four new books of Verse / Ralph Gustafson
 1945 Feb21 : Consuls of allies to attend pageant
 1945 Feb21 : Varese to conduct
 1945 Feb24 : France promises aid against Japan
 1945 Apr15 : The world of music
 1945 Jun3 : Programs
 1945 Jun3 : Varese choral program / Olin Downes
 1945 Jun5 : Music notes
 1945 Nov23 : Books-authors
 1945 Dec19 : Books of the times / Orville Prescott
 1946 Aug4 : Boldness in Criticism / Olin Downes
 1947 Mar30 : Programs of the week
 1947 Mar30 : The world of music : heaviest april schedule ahead / Ross Parmenter
 1947 Mar31 : Varese conducts mew music group / Olin Downes
 1947 May4 : Composer's Champion / Morris C. Hastings
 1948 Mar14 : The new School of American composers / Aaron Copland
 1948 Jul25 : Music in the future / Olin Downes
 1948 Dec21 : Mrs.Varese wins award
 1949 Jan24 : Composers league honors Rosenfeld / C. H.
 1949 Apr3 : The world of music : Premiere of bacon work / Ross Parmenter

1949 May7 : Fennell leads Eastman
 1949 May14 : Columbia festival in chamber music / Olin Downes
 1949 May22 : From the mail pouch : definition of music / Carlos Salzedo
 1949 Aug28 : World of music : September Lull / Ross Parmenter
 1949 Nov25 : A modernist defends modern music / Aaron Copland
 1950 Jan15 : Letters
 1950 Oct8 : U.S.role abroad : Harold C. Schonberg
 1950 Dec10 : Records : Contemporary music / Howard Taubman
 1951 Jan26 : New Work heard at concert here / C. H.
 1955 Apr17 : World of music : Mozart all over / Ross Parmenter
 1955 May15 : The world of music / Ross Parmenter
 1955 May30 : Creators and discoverers
 1956 Mar25 : Basic modern works on LP / Arthur Berger
 1956 Aug18 : Modern dancers perform at fete / John Martin
 1957 Apr21 : Modernism, with electronics, in Paris / Christina Thoresby
 1957 Oct19 : Brussels hears recent U. S. music
 1957 Nov26 : Library will honor Varese
 1958 Jul8 : Fairgoers hear electronic poem / Howard Taubman
 1958 Nov10 : Poeme by Varese has U. S. premiere / Edward Downes
 1958 Nov16 : Revel from way back / Edward Downes
 1958 Dec29 : World of music : Stravinsky's Jeremiad / Ross Parmenter
 1958 Nov29 : Music : in Memoriam / Howard Taubman
 1959 Mar15 : Montages of sound / Eric Salzman
 1959 Apr25 : Film crew to start wartz on monday
 1960 Jan31 : World of music : Koussevitzky foundation / Ross Parmenter
 1960 Feb8 : Chamber group is heard at Y / Ross Parmenter
 1960 Oct2 : Stravinsky-Gesualdo / Virgil Thomson
 1960 Oct30 : To those who have not decided
 1960 Oct30 : Records : Varese / Eric Salzman
 1960 Dec23 : Music : Varese Honored / Harold Schonberg
 1961 May2 : Music : Honor to a modern master / Ross Parmenter
 1961 Oct7 : Music : At new school / Eric Salzman
 1962 Sep23 : Disks : Varese / Raymond Ericson
 1963 May10 : Varese dinner on May 21 to help establish a prize
 1963 May22 : Composers honor Varese at dinner / Howard Klein
 1964 Jan24 : Bernstein conducts Deserts of Varese at Philharmonic
 1964 Aug30 : Music Programs
 1964 Sep3 : Music : Varese concert / Howard Klein
 1965 Feb21 : Oldtime avant – gardist / Theodore Strongin
 1965 Jul25 : Not quite an invasion / Raymond Ericson
 1965 Aug29 : Who makes music
 1965 Oct17 : Le Corbusier memorial planned at Columbia
 1965 Nov7 : Edgard Varese, composer, dead
 1965 Nov9 : Varese tribute paid at concert / Theodore Strongin
 1965 Nov12 : Father of modern music
 1965 Nov14 : Maverick, Revolutionary, and father to a generation / Harold C. Schonberg